

## ギリシア思想とキリスト教

— 研究員就任の挨拶に代えて —

今井 正浩

ギリシア思想といっても、その内実は多様なパラダイムが交錯する複雑な構造をもっている。単一に見える問題も、思想史のどの局面に定位するかによって、当然異なった様相を呈してくる。ここ数年来、古代ギリシア医学を当時の思想史展開の全体的文脈の中に構造的に位置づけるという視点から考察を進めてきた。初期以来、ギリシアの哲学者・思想家たちの重要な関心事のひとつに、「人間の本性（フュシス）」に対してどのような原理的説明を与えるかという問題が存在した。「人間の本性」について語ることは必然的に魂（プシュケー）について問うことを

意味し、さらに魂についての問いは身体についての問いをおのずと含意している。ここに、医学思想と哲学的探求とが接近する重要な局面が存在する。

身体と魂をめぐる問題はそのままキリスト教思想へと受けつがれ、複雑な自己発展のプロセスの中でさまざまな問題を生んだ。とくに初期キリスト教思想の問題場面に定位して、身体の問題がどのような局面において浮上してくるか、また当時の医学的身体論との関係について検証を行いたい。これによって、たとえばガレノス医学が中世キリスト教思想への展開の中で公認の医学的教説とされていく思想史のプロセスに、何らかの手がかりを得ることになろう。

(いまい まさひろ

キリスト教研究所研究員)